

---

# オレンジ色の木の実

のみのみの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレンジ色の木の実

### 【Nコード】

N8733P

### 【作者名】

のみのみの

### 【あらすじ】

精霊と魔法、そして科学が発達した世界にあるとある学園の物語。

## エピローグ（前書き）

最後まで書ききる事を最優先事項とし、お読みいただく方々への感謝の気持ちを忘れずに書いていきたいと思ひます。

拙い文章であり、更新は非常にゆつくりだとは思ひますが、よろしければお読みください。

感想、誤字脱字、その他厳しいお言葉など、何でも構ひませんので残していただけると大変嬉しいです。

読んでいただいている方にお願ひをするということは大変厚かましい事だとは思ひますが、執筆の励みとなりますのでこの場を用いてお願ひさせていただきます。

それでは、前書きが長くなつてしまひましたが、本編の方をお楽しみくださいませ。

## エピソード

「うっ！」

「だ、大丈夫？」

胸に刺さった剣。彼と帝王との死闘の結末は、相討ちという呆気ないものだった。

私は彼に駆け寄ったが、心臓を一突きされて既に回復の見込みはない。

それでも僅かばかりの希望を持ち、私は服の一部を剥ぎとり彼の胸に当てて、出血を止めようと試みた。

「だ……だめだよ。僕は、もう」

「何言ってるのよ！ ピンチの時こそ諦めるなって言ったのは、どこの誰よっ！」

「はは……そんなこと、言っのか、僕」

「そうよ！ 喋ると体力使うから、黙って」

「無理だよ。だってもう、僕は、げほっ、げほっ」

突然咳き込んだかと思うと、口から血を吐き出した。慌てて彼の体を支えながらうつ伏せにする。

何度か血を吐き出すと、彼は苦笑をもらした。

「はは、情けないな……ここで死ぬなんて」

「どうして！ 情けなくなんか、無いよっ！ 死なないよっ！ ちゃんと帝王を倒せたじゃない！ 私たちを守ってみせたじゃない！」

「そう、か。みんな無事か」

私の後ろから肯定の言葉が二人分聞こえた。

「……よかった」  
「よくないっ！」

自分の言った言葉にハツとした。  
彼は痛みに顔を歪ませながら私を見る。そこには困惑の色が見てとれた。

「わ、私はっ……」

僅かな逡巡。仲間であるはずの二人は、いつもこういう時に限って手を貸してくれない。

彼は顔を再び下に向けると、咳き込みながらぼそぼそと呟いた。

「僕は……君が、す——」

突然、支えていた彼の体の重みが増す。

そっと仰向けに寝かせると、彼の目は閉じられ、そこに生命の営みを感じることはできなかった。

「……………っ！」

私は彼の名前を呼んだ。だって、ただ寝てしまっただけなんだよね。こうやって呼び続ければ、いつか彼は目を――

「やめろ」

渋い声、パーティーで一番年長の男に肩を叩かれた。

私はそれを振り払い、血に汚れるのも構わず彼を抱き締めた。

「独りにしないでよ、帰ってきてよ、私、まだ何も言えてないんだよ、まだ何も聞いてないんだよ。ねえ、起きてよ」

「ミント……」

突然、頬を叩かれた。

目の前にはいつも冷静だったはずの渋い男が、目に涙を浮かべながら睨んでいた。

「俺だって悲しいさ。だがな、コイツはやるべきことをやった。だったら！　だったら、次は俺たちがやるべきことをやらないといけねえんだよ！」

「私は、私は好きなのっ！　いなくなっちゃったら、わたし、どうしていいか」

「甘ったれんな！」

男は反対の頬を殴ると、吹き飛ばされた私には見向きもせず部屋を出ていった。

「今のが、最後だ」

意味の分からない言葉を最後に、部屋は静まりかえる。

痛む体を動かして彼の所に戻ると、肌の色が青くなっていた。

この世界に来て初めて会った少年。圧政をしく帝王を倒すと勇んでいた。こっちに来て魔法が使えなくなった私は、必死に戦う術を学んだ。途中で渋い男とお姉さまと出会い、そしてここまでやってきた。

魔法が使えればきつと私は、彼は……どうなったというのだろう。魔法が使えれば、彼は助かったはずだ。そう、全ては私が魔法を使えなかったせい。そのせいで――

「ミントちゃん」

後ろから抱き締められ、思考が途切れる。

「ミントちゃん、彼は精一杯頑張った。頑張って、頑張って得た結果、帝王を倒したの」

「……」

「でもね、私たちには一体何が出来たの？」

「それはっ、彼と一緒に」

「帝王を倒す？ うん、そうだね。でも結果はこうなった。みんなみんな、頑張ったのに彼だけが倒れてしまった。何でだと思っ？」

「え？」

「何で彼だけが倒れたのか。ううん、違うわ。何で私たちだけ生き残ったのか」

「……彼が、私たちのことを、守ってくれた、から」

「うん、そうだね」

お姉さまは私をギュッと強く抱き締めた。

「私たちは彼に守られた。それなら、私たちには彼に何を返してあげられるかな」

お返し……私は、彼に守ってもらった。だから私は。私のできることは。

「うん……」

「守ってあげたかったんでしょ？」

「……うんっ」

「だったら」

私は立ち上がった。そして駆け出す。  
彼の夢を叶えるために。

## 学園祭1

盛大な拍手が私達を包みこむ。

ここ、イローズ王立学園の学園祭のメインステージで行った中等部6年の出し物『異世界物語』は大盛況だった。

内容は魔法の存在しない世界に迷いこんでしまった少女ミントが、国を倒すべく立ち上がった少年と出会い、帝王を倒すといった冒険風の物語だ。

ここ数年、そういった異世界迷いこみの小説が流行っているので、学年内でアイディアを出し合い衣装から音響までを全て学生だけで行ったのだ。

毎年初等、中等、高等の各部の6年生はこうして学園祭のクライマックスに盛大なパフォーマンスを行う慣習がある。今年のパンフレットには、先にやった初等部はコンサートを、これからやる高等部はサーカスをやると書いてあった。

各部卒業の成績の一部にも反映されるという噂はあるものの、先輩から受け継いだ大切なイベントを絶やさないように皆が頑張った結果だ。こうやってヒロイン役の私は一番前に立たされているが、影となって働いてくれた皆にも感謝を伝えよう。

そつと精霊を呼び皆に祝福を与えてもらうように頼むと、精霊達は喜び勇んで散っていった。無茶なことをしませんように。

進行係の声に促されて、私達はステージをあとにした。

「終わった〜っと」

「ルルちゃん、はしゃぎすぎだよ」

拍手や歓声の波から解放された私達は、一先ず各教室に戻ってきた。

お互いに声をかけながら大成功を喜ぶ。その手には色とりどりの花があった。

私と同じクラスのルルの手には真つ青な花がある。髪の毛と同じ色だ。

「ねえねえ、この花って、サンちゃんが？」

「そう、綺麗でしょ」

精霊達が行った祝福は、花を送るという人間らしいものだった。普段、こんな曖昧なイメージでお願いすると悲惨なことになるのだが、どうやら無意識のうちに確かなイメージを作り上げていたらしい。

「綺麗だね」

「精霊達も喜んでるみたい」

「ほんと！　ありがとうね、精霊さん達」

ルルには見えていないはずなのだが、的確に六人の精霊の方に向かってお辞儀をした。恐るべし、ルルの勘。

「それで、この後は何するの？」

「えっと、たしか」

「闘技場で後夜祭」

突然後ろから何とか聞こえる声量でそう聞こえた。

振り向かずとも誰だか分かるのだが、一応振り返ってみる。

案の定、そこにはティックがいた。その手には黄色に光る花を持

っている。

「お、ティックは金色か。私は青なんだよ。」

ルルがひょこつと私の陰から顔を出してティックを見付けると、その手に持った花を見せつけながらそう言った。

対するティックは、そうか、いつもと変わらない反応をする。

「お、三人とも違う色だな。俺は赤だったぞ」

ティックの更に後ろからやってきたのは、ジョンだ。ちなみに私の花は白色。

周りを見ると、他に緑や茶、黄緑に黒と、全部で八色あるようだ。

（みんなで用意したんだから当然よ）

心を、文字通り震わせて聞こえた声に、そつと頷いた。

「じゃあ、闘技場へ、ゴー」

左手を元氣よく突き上げたルルに合わせてジョンも右手を突き上げると、学園歌を歌いながら教室を出ていった。

もう一度、精霊達に感謝してからルルとジョンを追い掛けた。

説明していなかったが、私達四人はパーティーと呼ばれるものだ。実戦の伴う試験で優先的に一まとまりのグループとして扱ってもらえる制度で、中等部以上の同学年で二人以上かつ四人以下ならば基本的には承認される。また競技祭ではグループ対抗戦が存在する。

大体は同じ学科の仲のいい人と作るが、私達は全員が違う学科だ。私は魔法科、ルルは人文科、ティックは自然科、ジョンは技術科。社会科を含めた全五学科には年三回の実戦試験があり、中等部まで

は全て同じ内容であることからこうして仲のいい四人で一年の頃からパーティーを組んだのだ。

「……」

背後をついてきていたティックが立ち止まった。私も立ち止まり振り返ってみると、じっと私を見ている。

「な、何かな」

いつの間にか喧騒が聞こえなくなっている。二人だけがこの場所にいた。

もしかしてっ、と思ったその時、ティックの視線が右に逸れた。右？

視線を移すと、遠くに闘技場が見える。そこに入っていく学生達は徐々にその数を減らしていく。

つまり、考えに耽っていて目的地を大幅に通りすぎたらしい。

「……」

相変わらず口を開かないティックに恨めしげな視線を送り、そして一気に走った。

「もう、何で言ってくれなかったの」

## 学園祭2

初等中等高等合わせて約6000人、更に教師や研究生等を含めて8000人程を収容した闘技場は、学園祭の最後のイベントである後夜祭の開幕間近とあって物凄い熱気が籠っていた。

ルルやジョンを捜そうと思ったのだが、この様子では見付けられそうにない。

仕方なく壁際に寄りかかり、始まるのを精霊達と話をしながら待つ。

暫くすると突然、全体が真暗になった。それと共に会場が静寂に包まれる。

「諸君！」

鋭い言葉と共に会場のご真ん中に作られたステージの上にスポットライトと共に現れたのは、真白な衣装に身を包んだエイコ運営会長。そしてその隣には対照的に真黒な衣装に身を包んだクライシアスク学園祭実行委員長が立っていた。二人とも高等部6年生だ。

「学園祭は楽しんでもらえたかな？」

うおー！！ という野太い歓声が響く。恐らくステージ近くに  
いる運営会長応援団のものだろう。

会長はその反応に天使のような笑みを浮かべる。

「それはよかった。さて、本来ならばもう少し話していたのだが、生憎と時間がない。という事で早速だが最期のイベントを開始する」

会長、字が違っています。

「冗談だ。それでは詳しいことをクライスシアク学園祭実行委員長よりお願いする」

まるで私の心を読んだかのように私を見ながらそう言った会長は、その場でクルリと一回転をすると衣装を残してステージ上から消えてしまった。

残された実行委員長は溜め息を吐き、クライシアスクです、と小声で訂正してから説明を始めた。

「えー、ルールは簡単、最後までここに立っていられた人の優勝です。戦闘不能になること、生物を殺すこと、過剰攻撃をすること、闘技場から出ることの四条件の何れかに当てはまったら判定された場合は失格となり、研究員の方々によって客席の方へ移動してもらいます。いいですかいいですね、それでは始め」

やる気なさそうにそう言い残すと、実行委員長も会長と同じように消えてしまった。会場が明るくなる。

残されたのは困惑する生徒達約6000人。毎年、運営会長がこの最後のイベントを独断と偏見で決めるからといって、これは余りにも酷いと思う。

「……」

ティックがこちらを見ていたので、横を向く。

「暫く排他結界」

「わ、分かった」

そう言われて慌てて光の精霊をお願いした。

（物理、魔法、精神の干渉を排他する結果をお願い）

するとすぐに私とティックを中心とした小さなドーム状の幕が覆った。どうやら光も遮断してしまったようで、真暗になる。

ティックを見ると、どこから取り出したのかノートパソコンで何やら操作をしていた。画面には闘技場を斜め上から映した映像が流れている。なぜ外部の情報が、と思ったがこの結果は排他的であるだけなので不可能ではない。非連続なデータ通信を行っているのだろう。

「それは？」

「闘技場の現在状況」

なるほど。よく見ると、中央から少し外れた辺りでルルとジョンが人の山を築いている。そして動きの流れでこちらを見てきたかと思うと、ニヤリと笑った。

何か嫌な予感がする。

慌てて真黒な結果を見るが、流石に破られてはいないようだ。

（私の張る結果は、人間には破壊できませんよ。うふふ）

そう言ってきた精霊に苦笑をもらし、しかし頷いた。備えあれば憂いなし。

そうこうしているうちに、画面の闘技場に立っているのは残り八人となっていた。ルルとジョンの二人だけが中等部のようで、残りの六人は高等部、それも去年の競技祭で上位に入った人達だ。

ジョンが奇襲をかけ、それをルルが援護するという形で更に一人が脱落し、その間に他の五人の中の三人が脱落していた。中等部の二人と高等部の二人という、少し奇妙にも思える組み合わせが残る。

高等部の二人は、さつきステージに立っていたクライシス実行委員長と、連絡会の幹部のナミ先輩だ。

しかし、これは出来すぎては？

「……」

「ん？」

「結界の解除、10、9」

ティックがカウントダウンを始めた。慌てて精霊にお願いする。

（カウント0になったら解除して）

（了解ですわ。うふふ）

「5、4」

始めるならちゃんと言ってほしいが、ティックにそれを期待するのは無駄というものだ。

画面には相変わらず動こうとしない、あるいは動けない四人が立っている。

「1、0」

途端、視界が真白に染まり、慌てて目を閉じた。

収まっていく刺激に、恐る恐る目を開けると目の前数メートルの所にルルが立っていた。その隣にはジョンがいる。まさかと思いい後ろをみると、高等部の二人がいた。

突然現れたように見えた私に四人は驚いているようだったが、私こそ驚きだ。いつの間にこんな場所に移動したのか。

（俺だ）

（おまえかー！）

土精霊が淡々と言った言葉に猛烈に心の中で突っ込みを入れる。  
そんな漫才をしているうちに、周りでは戦う心構えが出来たよう  
だ。ティックはいつの間にか離れた場所に移動していた。

溜め息を一つ、私も周りに八精霊がやってきていることを確認し  
て、そつとお願いした。

（さつさと終わらせよう）

こんな茶番、誰が用意したかなんて決まっている。

### 学園祭3

最初に突っ込んできたのは、やはりジョンだった。左手で重そうな剣を振り上げ一直線にこっちに向かってくる。私はそれを見ながら軽いステップで左に走りだした。

風を併用してはかなり速いはずの私の動きに、ジョンは付いてきた。間合いに入るとすぐに剣を振り下ろしてくるが、そのたびに精霊が障壁を張って受け止める。

しばらくそんなことを続けていると、会場の端にたどり着いた。ここの方が私にとっては戦いやすい。

（竜巻）

迫りくるジョンやその後ろで傍観している四人を何となく視界に入れながら、端的な言葉で精霊にイメージを送る。

すぐにそのイメージは現実のものとなり、あと一歩という所にいたジョンは横に吹き飛んだ。だが他の四人は事前に準備していたのか結界や障壁を張って防いでいる。ティックだけはこちらを見向きもしないで、パソコンを何やら操作している。

（次はほの）

（主、右だ）

防がれている間に別の魔法を撃ってもらおうとした時、とっさに送られてきたイメージに慌てて左に跳ぶ。

振り返るといつの間にかナミ先輩がそこにいた。さっきまでかなり離れた場所にいたのに。

ナミ先輩が顔を上げる。正直言います、怖いです、この人。殺気が漂っています。

「ふふ、さすが学園6位ね。一度あなたとは勝負してみたかったの。運営会長には感謝しなければならぬわね」

あなたでしたか、会長をその気にさせたのは。という事は。

「ええ、ティックにも協力してもらっていますわ。まあでも、あの二人も残るとは思っていないんですけどが」

ナミ先輩は横を向いた。私も同じ所を見る。

そこにはルルとクライシアスク実行委員長が何やら話し込んでいる姿があった。

「あれ、何？」

「恋人同士、には見えませんわよね」

そう、一見ただ仲良く喋りあっているように見えるが、二人の間には何故か魔力の奔流がある。

（あれは、詠唱合戦、とでも言いましょうか。まあ、そんな所でしよう）

そう精霊が教えてくれた。つまり、喋っているように見えるのは詠唱をしているからで、そうやってあの至近距離で魔法を撃ち合っているということか。

その凄さに溜め息を吐きつつナミ先輩に視線を戻すと、既に臨戦態勢だった。私も慌てて構える。右足を半歩前に出して、右手は携帯用の杖を持って胸の前で構え、左手は下に下げる。

「ふふ、私たちも早く始めましょう」

「は、はい」

「それじゃあ、いくわよ」

とまあ戦うことになったのだが。

「ま、負けました」

地面に倒れた私を見下ろすナミ先輩。

あの後すぐに両手に持った短剣を振りかざしてきた。何とか初打は防いだものの、次から次へと迫りくる攻撃に翻弄され、あっという間に負けてしまった。

ナミ先輩が言った学園6位というのは、競技祭の個人総合成績が6位だったというだけで、当時の各会の幹部は参加していない。そこにはナミ先輩も含まれていたはずだから、こうして勝負させられているわけなのだが。

「私は、魔法の分野だけです、点数を取れたのは」  
「……」

そう、私は武術関係には一切出ていない。それなのに6位を取れたのは偶然という他はない。いや、それが悪夢の始まりだったのかもしれない。なにせ中等部生のこの私が運営会の――

「サンちゃん、大丈夫？」

嫌な方向に向かおうとしていた思考は、ルルが話しかけてきたことで途切れた。

顔を向けると、遠くにクライシス実行委員長が倒れているのが見える。その先にはティックがまだ何かをやっている。

「負けちゃったけどね」

ルルにそう返しながら立ち上がり苦笑する。

ティックは一体何をしているのだろうか。なぜか呆然としているらしいナミ先輩を横目に考えてみる。

答えはすぐに出た。

「……それなら、私は客席に——」

と、足を踏み出そうとした時にそれはおこった。

地面の上が突然ある図形を描くように光りだして、それと同時に体の自由がきかなくなる。ルルやナミ先輩もそれは同じのようで、驚愕に目を見開いている。

それにしても、ナミ先輩はコロコロと表情を変える忙しい人のようだ。

視線の先にいるティックは、仕事は終わったとばかりにパソコンを閉じて立ち上がると、こっちに歩み寄ってきた。

「油断は厳禁」

そう言っ指をパチツと鳴らすと、私の目は強制的に閉じられて睡魔が襲ってきた。そして抵抗すらできずに私は地面に倒れた。

んん、ここはどこだろう。

そう思っ、ゆっくりと目を開けた。白い天井に白いカーテン、更に白いベッドに囲まれた空間。医務室だ。

ここに来るのは初めてではないが、目が覚めたらベッドにいた、

なんていう事は初めてだ。

「あら、起きた？」

カーテンの隙間から顔を覗かせたのはミリー教諭だ。純白の天使、なんていう恥ずかしい二つ名を持つ、優しいお姉さんといった感じの医務室長で、回復関係の魔法や精霊と相性がいいようで、精霊使いでもある。私の精霊が彼女の精霊と部屋の隅の方で雑談していた。

「サンちゃん起きたっ！」

「お、やっと起きたか」

「……」

上体を起こしたのと同時に扉を開けて入ってきたのは、ルル、ジョン、ティックの三人だ。

「ん、何とか大丈夫そう」

「そりゃよかった。あん時、突然会場一杯の魔法陣が現れたから焦ったぜ」

「そうたよ」。ティックがまだいるなんて分からなかったしね。結局、優勝賞金は全部ティックが貰っちゃうし。後少しだったのにな」

やはりあの時ティックは魔法陣を描いていたようだ。

「そういえば、ナミ先輩は？」

「ナミさんなら、ちよつと前に起きて出ていったわよ。それと」

ミリー教諭が手元の資料から目線をあげる。

「もう夜も遅いし、早く帰りなさい」

「はい、ミリー先生さようなら」

ルルはミリー教諭にそう言って部屋を飛び出していく。

残された私とジョンは苦笑しながら、ティックはいつも通りにミリー教諭に挨拶をしてルルを追い掛けた。

## 魔法力学基礎 第十一回講義

教室の扉が開かれ、そこから30を過ぎたくらいの年若い男性が入ってきた。

彼は教壇の上に立ち、目の前に座る60人程の生徒を見回す。

「おはよう」

「おはようございます、先生」

彼の担当授業の一つ、中等部魔法科6年と自然科6年共通の魔法力学基礎の、13回の講義の内の11回目である。

「おや、サンは欠席か」

「運営会長に呼び出されたようです」

「そうか」

一つの席が珍しく空いていたので聞いた先生は、返された言葉に頷くと黒板に向かう。

「11回目の今日からは、スミレの第四方程式の説明を行う。第一から第三まではこんな式だったな。それじゃあ、サミュエル、第一方程式を説明してくれ」

指名された生徒は立ち上がり、教科書を見ながら説明を始める。

「スミレの第一方程式とは、体内に存在する魔臓一つが行うことを数式化したもので、理想的な条件下での魔力から魔力線がもつ最大エネルギーへの変換効率を表した方程式である」

「そうだな。それじゃあ第二方程式は、ケシー、説明してくれ」

先生は生徒に頷くと、別の生徒を指名して第二方程式の説明を求めた。

「スミレの第二方程式は魔力線の状態を表す微分方程式であり、別名魔場方程式とも呼ばれます」

「それじゃあ第三方程式をアイリーン、説明してくれ」

先生は更に別の生徒を指名して、第三方程式の説明を求めた。

「第三方程式は魔力線のもつエネルギーの分布とある領域のマナ密度から発生する魔力ベクトルを表した方程式です」

「よし、全員復習はできたか。分かんなかったら隣のやつに聞くなりしろよな。それじゃあ、第四方程式の説明に入るぞ」

先生は黒板に向き直ると第四方程式と、式の側に各変数の説明を書き始めた。

「えー、第四方程式だが、これは飯倉董が晩年に発見したものだ。簡単に言ってしまうと、魔法陣とそこに注がれた魔力の量と、そこから発生するエネルギーとの関係をあらわす方程式だ。魔法陣学を取った生徒は教えてもらったと思うが、この頭についた $r$ の二乗分の $m$ からも分かるとおり、威力は距離の二乗に反比例する。ここからも分かるとおり、この第四方程式は他の三つとは関係が無いと言ってもいい。 $r$ について、 $0$ から無限遠まで積分した式はベルリの方程式という名前がついている。今日の課題はこの第四方程式からベルリの方程式を導いてもらう。第二方程式でやったのと同じように、同じだから、直ぐにできるだろ」

「先生」

一人の生徒が手を挙げた。

「何だ？」

「詠唱が第一から第三までの方程式三つで書かれているのに、なぜ魔法陣は一つだけなのですか？」

「いい質問だ。これには以前説明した歴史的な経緯が大きき関わってくる」

そう言う先生は黒板に一つの方程式を書き込む。

「前回説明したジャクモの詠唱方程式だ。これが第一から第三までの三つの方程式をまとめたものだというのは納得してもらったと思う。言ってしまうえば詠唱方程式と対になるのがこの第四方程式だ」

先生は生徒に向き直った。

「さて、飯倉董が最初に見つけた方程式は？ ミール」

「第三方程式です」

「そうだ、第三方程式が最初に見付かった。これは当時、マナという物質が発見されたことに起因する。マナについての詳しい話はこの授業ではやらないが、電子と陽子のように陰性マナと陽性マナの対で出来ていることが実験的に示されているんだが、この事を最初に発見したのが飯倉董だ。そして、この実験から第三方程式を導いた」

先生はここで一拍をおいた。

「ここから魔法の発現順序を遡るように、第二方程式、第一方程式と発見した訳だが、どうしても魔法陣にこれらの式を当てはめられなかったそうさ。実際のところ、第四方程式は晩年の手記にメモの

ように書かれていて、導出過程が全く書いてないので、偶然この式を思い付いたのかもしれない。ジャクモの詠唱方程式を元に書かれたとも言われているが、真相は明らかにはなっていない」

先生は黒板に更に三つの式を書き足す。

「第一から第三方程式と対になるこんな方程式も存在する。導出は対応するスミレの方程式から簡単にできるから、興味があったらやってみる。まあこれらの方程式から第四方程式が導かれる事が証明されたので、一時期は六つの方程式を基準にしようとする主義もあったんだが、飯倉董が見つけた四つの方程式を使うことが主流になっていったんだな。まあ単純に使いやすかったからだろう」

ここで先生は生徒を見回した。

「それじゃあ、第四方程式の詳しい説明に入るぞ」

先生は一旦黒板の文字を全て消し、再度第四方程式と変数の説明を書いた。

「これが魔法陣に一樣に魔力が込められた理想的な条件下での式だ。 $r$ は魔法陣の重心からの距離、 $m$ はマナ密度、 $p$ が魔法陣に込められたマナの総量、 $\mu$ は魔力定数、 $n$ は魔法陣の要素の種類の個数で、 $n$ 次元ベクトル  $a$  は各要素の個数、行列  $A$  は各要素の重みだ。魔法陣の要素分解についてはもうやったと思うが、その要素の組ごとに重みは決まっている。その一部が教科書102ページの表だ」

大きな表が4つ並べて書いてある。

「四つの表はそれぞれ魔力ベクトルの各要素に対応したものだ。第

一方程式と似たようなものだが、若干異なっている。詠唱の要素と魔法陣の要素が対応している場合は同じだな。まあこの表は覚える必要はない。試験でも必要な部分は必ずどこかに載せる予定だ」

それから先生はいくつかの例題を解きながら方程式の使い方を説明していく。

「それじゃあここまで説明した所で、後は章末問題の7と、始めの方で言ったベルリの方程式の導出過程をレポートにして提出してくれ。出した人から退出していいぞ」

先生はそう言うのと近くの席に座った。

教室には生徒たちの話し合う囁き声が響いている。

## 魔法陣1

書類、書類、書類。

書類書類書類書類書類書類書類書類書類書類。

渦高く積みあがった書類は全て来月に迫った期末試験に関するものだ。

運営会試験課長である私、ことメイシア・アングロスは教務会や運営会長から回ってきた書類の整理、確認に大童である。

そもそも筆記試験に関しては教務会が全てを行うのだが、実技に関しては運営会も協力することが毎年の慣習なのだ。前学期の時に散々思い知ったというのに、これはまるで

「地獄だー!!」

「私の言葉を盗らないでください」

副課長のシュリが、まるで私の心を読んだかのように叫んだ。彼女の机の上には私に負けず劣らずの紙束がある。

普段は外回りという名目のサボリをする彼女だが、流石にピンチの時には助けに来てくれる頼れる副課長だ。

「やっぱりメイもそう思うよね、この量って異常だよね?」

「どうやら初等部試験場で正体不明の魔法陣が発見されたようで、全試験場に別の人材で再調査しなければならなくなったようです」

「うあゝ最悪。誰よそんな厄介なもの見つけたのは」

「中等部6年のサン・メグさん」

「あー、この前の競技祭で総合6位の子か。ミナール会長にスカウトされてたね」

サン・メグさんは中等部6年の魔法科所属で精霊使いとして学園

内ではわりと有名な人だ。余談だが、精霊とは主にマナを食料としている生命体のことをいう。進化論的には哺乳類に近いとされていて、霊長類（ヒトも含まれているので注意）にはその名残といわれる魔臓が存在している。

そんな精霊が人に従属することは珍しいことで、教諭陣の中にも混色性精霊だと3匹、純色性精霊だと1匹を使役している人がいるくらいで、普通なら混色性精霊1匹が使役できればいい方である。だがサン・メグさんは純色性精霊を8匹、しかも魔法の8属性分類方に照らし合わせると全ての属性を保有していることになる、らしい。

連絡会の知り合いから聞いた話だが、恐らくは間違いないだろう。

「試験で死人は出したくないでしょ。それでも他の所に回した結果なの。まだ猶予はあるから、さっさとやってしましましょう」

「うーい」

そして再び書類の処理に戻ろうとすると。

「お茶をお持ちしました」

トルネがお茶を三つ持ってきた。

三つ？

この部屋には私とシュリ、それと今入ってきたトルネしかいない。シュリは受け取ると一気に飲み干し、直ぐに書類の山に取り掛かっている。トルネはこの部屋に長居するような性格ではない。

「ありがとう。誰か来客？」

そう聞いてみると、トルネは頷いた。

来客自体は珍しいことではないが、長居するような来客は今では遠

慮してもらいたい。

「リン・ミドリ連絡会長です」

「は？」

この時の私はまだ、この出会いを些細なものだと認識していた。

運営会試験課は、暇な時と忙しい時の差が激しい。

年四回ある試験の前一ヶ月程が忙しいので、一年の半分ほどが忙しいことになる。

私、メイシア・アングロスは高等部5年技術科音楽コース声楽専攻なのだが、毎年の学園祭と、後期期末試験を兼ねたコンサートの二回、公の場での発表会がある。

そして今はコンサートの練習をしているのだが、その地獄のような書類の処理もあり休む暇もなくへとへとだ。

『イリスによるカンタータ第7番』

専攻長との直談判によりその一曲だけで成績評価をもらえることになったが、メインの曲ということもあり難易度は高い。

「メイ、大丈夫？」

どうやら疲れているのが顔に出ていたらしく、六年の先輩から声をかけられた。

「大丈夫です。なんとか間に合わせます」

「無理しないでね？ 体調管理も大切よ」

はい、と返事をして、音程がなかなかとれない所を練習する。友達と音程や発声方法などの擦り合わせをやっているうちに、いつの間にか放課後になってしまった。

明後日にホール練習を行うとの放送が入り、嬉しそうだったり焦ったりといった顔をした専攻仲間を見て、少しだけリフレッシュできた。

帰りの誘いがあつたが、試験課長としての仕事があるので断り、運営会試験課室に向かう。

「アングロスさん」

音楽コースの存在する12号館から運営会本部のある1号館に移動している途中で、声をかけられた。

振り向くと、人文科の制服を着た男子が一人、立っていた。

「はい？」

忙しいのだが、運営会幹部としては無視するわけにもいかない。青みがかつた黒い髪の毛は肩下まで伸ばし、紺の瞳はパツチリとしている。頬は仄かに赤く、ぷっくりとしている。女子用の制服を着せても似合うのではないだろうか。

そんなことを思っていると、男子の口が口呼吸をする魚のように動き出した。

「う、う……う」

「う？」

「ごめんなさいっ！」

突然大きな可愛い声をあげたかと思うと、目の前が真っ白に染ま  
った。

いくつかの足音が聞こえてきた所で私の意識は途切れた。

## 魔法陣2

目を開けると、真っ暗だった。麻袋のようなものに入れられているらしく、居心地はとても悪い。

音は自分の呼吸と布摺れだけ。辺りには人の気配は無い。そもそも回りの気配を探れるということは、この麻袋に何の仕掛けも施されていないということだ、それはつまり運営会幹部を舐めているということだ。

いくら技術科音楽コース声楽専攻の私でも、ただの事務処理担当ではない。危険なことを経験したのは一度や二度ではないのだ。

そもそも詠唱魔法の原理は、言葉を発することで生じた電気刺激が魔臓に与えられることで魔力線が発生するのだが、その魔力線の質や量は直前の魔臓の状態に大きく左右される。そのため連続詠唱はできないものもあるし、逆に相乗効果をもたらすものもある。

声楽専攻という所は、もちろん一般的な歌を歌うこともするが、効果的な詠唱法を模索する一分野ともいえる。昔は歌を歌って儀式のように魔法を発現させていたこともあったらしい。まあこの分野を理論的に学ぶならば人文科魔法言語専攻をお勧めするが。

そんなわけで、私はクライシアスク先輩には劣るものの、声楽専攻の中でもそれなりの詠唱実技の成績を修めており、だからこそ運営会試験課長という幹部の肩書きを持っているのだ。

前置きが長くなったが、つまりはこういうことだ。

「切れよ」

そう私が言うと、麻袋はあつという間に粉々になり、ここがまだ学園の敷地内だということが分かった。

技術支援棟地下2階掃除用具入れ。ちなみにこの部屋というには心もとない部屋には鍵は無い。少し警戒したが、物理的な畏も無い。

お粗末にも程がある。

「まあ、出ますか」

そつと扉を開けると、放課後ということもあり廊下をそれなりの数の人が行き来している。人の波が途切れたのを確認して、素早く外に出て、とある一室に向かう。

特殊なコードと学生手帳を使い中に入ると、真っ白な立方体の部屋の真ん中に魔法陣が書かれている。転移室と呼ばれる、ある一定のアルゴリズムによって別の転移室に転送される場所だ。あと30秒程で高等部試験課室のある1号館に転送されるようになる。

そもそもなぜ私はあんな場所に入れられたのか。方法は後回しにしても、目的には当たりをつけておきたい。私を試験課室に向かわせるのを遅らせたかったか、あるいはそこに向かうまでの間に見せたくないものがあつたのか、はたまた単なる人違いか。

毎年、試験問題を盗もうとして運営会試験課を襲撃するグループや個人はいるが、試験問題は教務会試験課が持っていて、仮にも学生主体である運営会が持っている筈もない。後期期末試験になれば流石にそんな馬鹿なことをする学生はいない。

ではあの魔法陣はどうだろうか。確かに運営会試験課でも魔法陣が書き記された書類はあるが、特に機密でもないので探そうと思えば合法的に手に入れることはできる。描いた犯人は魔力紋で調べているらしいので、隠す必要性はない。

人違い。有り得なくは無いが、あそこは私が毎日あの時間に通る場所だ。待ち伏せしていたようだし、間違えたとも思えない。

詰まるところ、私があのようにお粗末に拉致される理由は無さそうで、あるとしても強い意思があるとは思えない。現状では少し気に留めておく程度で大丈夫だろう。

リン・ミドリ連絡会長の言葉も気になるが、それは今のことではないだろう。

『メイシア・アングロス君、君に一度だけチャンスを与えよう。必要になったら呼んでくれたまえ』

試験課室に戻ってくると、追加分の山ができていた。以前よりは  
大分少ない量だ。

「遅ーい」

シュリが半泣きになりながら恨めしそうに睨んできた。

「ごめんなさい、ちょっと捕まっついて」

「もう、大変なんだからね」

そう文句を言いながらも手だけは動かすことをやめない。  
私も席につき、せっせと事務処理をこなそうとしたのだが。

「メイ、いる！」

声に振り返ると、トルネが慌てたように部屋に駆け込んできてい  
た。

「どうしたの、トルネ」

「よかった。自治会から招集命令が。あなたが誘拐されたからつ  
て」

「誘拐！？」

トルネがここまで慌てているのは珍しいが、それだけ私のことを心配してくれたのだろう。シュリも手が止まっている。

「大したことではなかったんだけど。自治会には顔を出しておいた方がいいですね」

そう言うと、シュリの顔が面白いように青くなっていく。いじめるつもりはないのだ。結果的にそういう流れになってしまったんだ。

「ごめんなさい、シュリ。トルネと自治会に行ってくるからもう少し頑張ってもらえるかしら」

「お、おう」

口調が変になったシュリに心の中で謝りながら、落ち着いたらしいトルネを伴って自治会に向かう。

自治会とは、五つある幹部会の内の一つで、学園の風紀と治安を守る実動部隊のことだ。先日行われた学園祭ではかなり忙しかったらしく、私やシュリですら招集を受けて手伝ったりしたくらいだ。

「誘拐犯が捕まったそうで、それで事件が発覚しました」

道中でトルネが事情説明を始めた。

「誘拐したのは高等部人文科国文学専攻3年のヒタカ・ケイジ。通報者は同スイッチ・ミタリス他二名。自治会は現場検証を既に終え、物的証拠が確認されたためケイジに同行を求め、彼がこれに同意したため現在の彼の身柄は自治会が確保。またミタリス他二名も同様に自治会で詳しい事情聴取中だそうです」

「ミタリスってあのミタリスよね」

「はい」

友人であるトルネは連絡会員でそれなりの地位にいらしく、こ  
うやって細かい情報を教えてくれるのはありがたい、のだが。

「夕食、おごってくださいね」

勝手に話だした情報に情報料を付けないでもらいたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8733p/>

---

オレンジ色の木の実

2011年10月5日00時44分発行